

知的障害がある人にとってのメディアとは？

当事者主体の放送局・パンジーメディアの取り組みから

●パンジーメディア統括 林 淑美



スタジオでの撮影。左の女性と中央の男性はベテランのキャスターです

役割を持つ

パンジーメディアでは、知的障害のある当事者たちが様々な役割を持っています。二人の当事者がプロデューサーです。番組の内容が知的障害のある人たちの立場に立っているか、分かりやすい内容になっているかなどをチェックします。メディアの当事者会議を開催し、1カ月のふりかえりと次月のスケジュールを確認します。出演依頼や試写会の開催通知も、二人の当事者プロデューサーの役割です。また、三人の当事者が撮影や音声などの機材を担当しています。キャスターをはじめ、記者や番組の出演者もほとんどが知的障害のある人です。これまでの出演者は60人を超えています。

準備期間も含めると、パンジーメディアとして活動を始めて、2年が経ちました。この間で最も驚いたことは、当事者がどんどん元気になっていくことです。当事者も職員も映像に関しては、初めての経験です。そのためみんなが同じように慌てふためいたり失敗したりの連続でした。そのことが、結果としていつも

る人が関わっているニュースなどを当事者の視点で伝える「パンジーの眼」。料理を作るのも食べに来る人も知的障害のある人たちの「パンジーキッチン」。知的障害のある人がこれまで歩んできた人生と今の自分の思いや夢を語る「わたしの歴史」。知的障害のある人の日常を追うドキュメントや当事者の発想で作ったドラマなど盛りだくさんの「特集」。こうした内容で構成された番組です。

映像の力に驚く

以上に一緒に活動をしているという一体感を生んだのかもしれない。カメラ操作がうまくできなかったり、セリフが言えなかったりしても何度もチャレンジし、決してやめるとは言いませんでした。

「パンジーキッチン」の撮影風景。この日のメニューはホワイトデーのおかえしスイーツ。当事者もカメラ撮影に挑戦(左)

当事者個人に焦点を当てた「わたしの歴史」は、出演希望者が続出の人気企画です。制作はまず、職員がその人の話を聞くことから始まります。それを何度も繰り返すうちに、苦しかったことやどうしていいか分からなかったことなど、自分の中に閉じ込めてきた思いを語ってくれるときが来ます。泣きながら話す人もいます。そして、台本が完成し、カメラの前で自分の人生を語った後のやり切った思い、試写会での大きい拍手と仲間や職員からのいたわりの言葉。それらの一つひとつが、「私は一人ではない。仲間や支えてくれる人がいる」という自信につながるのだと思います。

試写会には、毎回80人くらいの知的障害のある人が集まります。その中には、障害の重い人や、なかなか落ち着けない人もいます。しかし、ほとんどの人が50分間熱心に見ています。そして、終了後には、たくさんの方が感想を言ってくれます。映像は情報量が多く視覚や聴覚な

ど総合的な感覚で理解できるので、知的障害のある人にもハードルが低いのだと思います。

また、「大学の授業で使いたい」など外部からの依頼も多くあります。番組視聴者からも「当事者の皆さんの心の内を丁寧になぞり、一人ひとりが心を開いていく様子が自然に受け止められました」などの感想を寄せてくれます。知的障害のある人だけでなく、誰にとっても、映像の果たす役割は大きいことを実感しています。

パンジーメディアの今後に向けて

私たちは、パンジーメディアの活動を全国に広めたいと思っています。その第一歩として、北海道の知的障害のある人が記者として活動を始めました。いつか、パンジーメディアの支局が全国に展開できる日を目指しています。そして、その活動が、やまゆり園のような事件や知的障害のある人たちへの虐待がなくなることにつながると信じています。

